

倉本一平
長谷川周三
の
歴史レポート



前回は、近衛前久が正親町天皇の意を受けて、信長を警護が手薄になる京におびき寄せて殺害する算段を講じている様子や、信長が家康を亡き者にするために、甲州征伐の帰路家康領を視察して安土に帰った状況などをお話ししました。

今回は、信長が家康を殺害するための手段を、色々と模索するところを中心に話を進めていきたいと思います。

黒田官兵衛備中に帰る

天正10年(1582年)5月初旬、官兵衛が備中高松城攻めの秀吉の本営である蛙ヶ鼻に帰り着くと、秀吉は官兵衛の帰りを今か今かと待ちかねていました。そして秀吉は、官兵衛の顔を見るなり、弟の秀長、蜂須賀小六などを集めて高松城をどのように攻略するか、軍議を始めました。

官兵衛としては有馬の湯で近衛前久に会った話を、秀吉に早急に伝えたかったのですが、秀吉にとっては何よりも高松城攻落が最優先で、官兵衛が留守にしている間に高松城を攻めて、既に多くの兵士を失っていました。

高松城は湿地帯に築城された城で沼地が天然の要塞になっており、城に近づくには大手門から伸びた小道しかありませんでした。

城主の清水宗治は5,000余りの兵と共に籠城して秀吉軍と応戦する構えを取っており、秀吉軍がその小道を使って攻撃した場合には、城内から鉄砲や弓矢を放して大打撃を与える準備をしていました。秀吉は当初、2万の兵力を使って力攻めに押しつぶせば、勝利はいとも簡単に手に入ると思っていたのですが、大手門からの狭い道に投入できる兵士は百人

が限度で、鉄砲を持たせて攻撃を仕掛けてみると、城内からは弓矢や鉄砲が嵐の如く降り注ぎ、多くの兵を失いました。

秀吉は官兵衛の留守中、弟の秀長、蜂須賀正勝らに勝ち戦につながる奇策はないかと問いかけましたが、これといった妙案は出てきませんでした。

そこで官兵衛は高松城周辺の地形図を暫く見つめたうえで、三国志の武将「曹操」が猛将「吕布」を孤立させて死に至らしめた下邳（かい）の戦いで、その戦法に用いた水攻めで高松城を攻略しようと提案しました。

秀吉は思いもよらない作戦に驚き「官兵衛、水攻めには何日必要か」と尋ねます。

官兵衛は目を閉じてしばらく考えた末に『15日程度で高松城を取り囲む堰堤を築き、完成後は、城の西北から東南に向かって流れる大川「足守川」を堰き止めて川の水を堰堤の中に注ぎます。これからは雨の降る日が多くなりますので、早いうちに城周辺は湖と仮すでしょう。そして城内の食料が底をつけば降参するのは必定です』と秀吉に自信に満ちた表情で応えました。



軍議が終わると官兵衛は秀吉に、有馬の宿で前久に会ったことを報告しました。

秀吉は官兵衛の話をも最初は穏やかな顔つきで聞いていましたが、信長が光秀や細川忠興、中川清秀、高山右近らを連れて富士山見物をしながら、家康領の駿河、遠江、三河を通過して帰ったと聞くと、にわかに厳しい表情となり「官兵衛、殿の旅はいかがであったか？調べてみたか」と声を震わせながら質しました。

官兵衛は有馬の帰りに高槻城に寄り、信長と同行して東海道を帰った高山右近から旅の様子を聞いていたので、秀吉には詳しく伝えることが出来ました。

秀吉が気に病んだのは、近衛前久が信長に徳川領視察に同行させて欲しいと懇願したにも拘らず、それを許さなかったことです。

信長と前久は日頃から鷹狩や乗馬を通して親交を深める間柄で、信長が単なる物見遊山で富士を見て東海道を帰還するのであれば、前久の要望は聞き入れたはずです。

しかしそれを許さなかったのは、間違いなく信長が家康や穴山梅雪を討伐するための事前調査だと直感したからです。

その後の秀吉の心中は穏やかではありません。

光秀に対するライバル心がメラメラと炎上して「仮に信長が家康を討つと決めれば、その役目は光秀に命ずるであろう。信長の命を受けた光秀は、どんなことをしても家康を殺す。そうなれば光秀が拝領する領地は今の近江坂本・丹波に加え、新たに三河、駿河、甲斐に拡大する。光秀の織田家での地位は相変わらず織田信忠に次ぐものとなり、自分が毛利に勝利しても光秀を越えることが出来ない。何とかして光秀の家康討伐は阻止しなければ」という強い気持ちが秀吉の胸中に渦巻きました。

そこで秀吉は祐筆を呼び、信長宛ての親書をしたためました。

そこには、信長に戦地で毛利軍との最終決戦で采配を振るって欲しいという内容が主でしたが、毛利に庇護されて備前の「鞆（現：福山市）」にいる足利義昭が、未だ將軍の地位を利用して九州の島津氏や大友氏、龍造寺氏、四国の長宗我部氏に毛利軍への加勢を要請し、その中でも長宗我部がそれに応ずる姿勢を見せているという、根の葉もない嘘も書き添えました。

秀吉はこの文を送ることで、信長が義昭や長宗我部への対応を、この二人と密接な関係にある光秀に必ず命ずるであろうと考えました。

そうなれば家康討伐は毛利征伐が終わるまで先延ばしにされ、あわよくば自分にその役目が回ってくるかもしれないという期待が脳裏をかすめていました。

信長の家康・穴山殺害プラン

信長は4月末に甲州征伐から安土に戻って以来、戦勝祝いに訪れる多くの公家や武将、商人たちの対応で忙しい日々を送っていました。

勿論その中には、茶人の今井宗久、公家の勸修寺晴豊が入っていました。

信長は宗久に会うと、戦勝祝いに博多の豪商島井宗室が名陶「檜柴肩衝（ならしばかたつき）」を持って来てくれることに大層喜び、6月の上旬に京で茶会を開きたいとの宗久の願いに満面の笑みを浮かべて承諾しました。

しかし、勸修寺晴豊への対応は、宗久の時とは打って変わって不機嫌そのものでした。

信長にとって天皇からの三職推任（関白、太政大臣、征夷大將軍のいずれかの官位を信長に選択させて授与すること）は、今となってはどうしても良かったからです。

信長の狙いは都（みやこ）を京から安土に遷都して正親町天皇には安土城内の「御幸の間」に移って貰い、天皇や朝廷、武将、商人、農民に至るまで全ての国の民を支配する国

王になることだったからです。

晴豊には「6月になって正親町天皇の都合のよい日を選んで知らせてくれ」と無愛想な表情で言い捨て、見送りもせず来客用の部屋を出ていきました。

そして、信長がこの時期最優先で遣るべき課題は、家康と穴山梅雪を安土に誘い出して葬ることでした。

そこで、近江佐和山城主（現 彦根市）の丹羽長秀に、家康に早急に安土に来るよう催促しろと命じました。

長秀の使者は急ぎ家康の居城浜松城に走り、徳川家の家老職である石川数正に面会して信長の意向を伝えました。

数日後には数正から長秀宛てに書状が届き、5月に入って信長の都合のよい時期に50人ほどの家臣を連れて伺いたい、そして安土や京、堺への案内は光秀にお願い出来ないかと記してありました。

長秀は早速その書状を持って、信長のもとに馳せ参じました。

信長は数正からの書状を読むなり小姓の森蘭丸を呼び「晴豊に会って、天皇への拜謁の日取りは決まったか聞いて参れ」と言い付けました。

そして信長は舌打ちして「家康め、光秀を家康や梅雪らの刺客にさせないように先手を打ってきよったか」と、長秀には聞こえないよう小声で呟きました。

信長は長秀を返した後、一人天守閣から琵琶湖を眺めて家康暗殺をどのように実行するか、宣教師から献上されたワインを飲みながら考えました。



安土城から琵琶湖を望む

まずは、家康、穴山梅雪一行のおよその行程をイメージします。

「家康と穴山梅雪一行を5月半ばに安土に招く。安土での宿は城内に隣接する惣見寺を当て、饗応役は光秀にする。光秀には3日ほど安土城内や琵琶湖周辺を案内させ、3日目

の夜は前久や九条兼孝ら公家衆も招いて贅を尽くした最高級の料理で持てなす。光秀にはその日のうちに饗応役を解いて義昭への対応と秀吉の毛利攻めの加勢に向かうよう、龜山に帰国させて遠征軍を整えさせる。翌日以降の家康の接待は儂や長谷川秀一が務めて、昼間は幸若大夫や梅若大夫に舞や能を披露させ、時には鷹狩にも出かけてみる。

京や堺の案内はそのまま長谷川秀一に任せ、京の宿は呉服商人の茶屋四郎次郎の屋敷に、堺の宿は堺の代官を務める松井友閑の屋敷にする。そして堺から後は、きっと家康と梅雪は儂に旅のお礼に来るはずなので、迎える場所を決めねばならぬ。問題はその行程の中で、家康ら一行をどこで始末するかだ。

20年もの間兄弟同様な関係で結んできた家康との同盟を、家康を殺すことで一気に解消するとなると、さすがの信長もその殺害方法は慎重に考えなくてはなりませんでした。

それは、家康、梅雪一行を、安土城内や京、堺の旅の途中で光秀に襲撃させて殺させたとなると、駿河や三河、甲斐に残された家康や梅雪の家臣が必ず報復の兵を挙げる。また、織田の家臣たちも20年来同盟を結んできた家康を、闇討ち同様の汚い方法で殺したとなると、自分に対する忠誠心に翳りを落とすことになると考えました。そして暫く思案した末に信長が出した答えは、事故に見せかけて殺すことでした。

最初は、安土から京へ琵琶湖を船で渡らせて、途中で船を沈没させて殺すことを考えましたが、甲斐の梅雪は兎も角、家康ら一行は遠州灘での水連で鍛え抜いた武将たちばかりで、家康を助けて岸まで泳ぎ着くのはそれほど困難なことでは無いと考えました。

では他に何か良い策があるのかと思案しているうちに、ふと比叡山延暦寺の根本中堂や大講堂を焼払った時のことを思い出しました。

焼け跡から発見された僧侶らの遺体はどれも損傷が激しく、身元の判別が困難でした。

そうであれば、不慮の火事に遭遇したと言って、家康や穴山梅雪の家臣に首が付いたままの黒く焼け焦げた遺体を送り届けてやれば、一時は信長に殺されたと疑うかもしれないが、殺された確たる証拠が無ければ、不本意ながらも諦めてくれるだろうと考えました。

では、焼き殺すとすればどこの宿にするか。

「安土の宿の摠見寺どうか。安土城に類焼する危険があるし、来た早々京や堺も見ずに死なせるのは心もとない。そうかと言って京の茶屋四郎次郎や堺の松井友閑の屋舗に火を放てば、彼らも火に包まれて死ぬ可能性がある。となるとどこが良いのか」と思案を重ねながら、信長は晴豊に使いに出していた蘭丸の帰りを待っていました。

なぜならば、天皇拝謁の日取りが決まれば、それを基軸にすべての計画が連鎖出来るようになると思ったからです。

そして子の刻（午前0時）を過ぎたころ、蘭丸が帰ってきました。

蘭丸が聞いてきた日取りは、6月2日巳の刻（午前10時）ということでした。

光秀と長宗我部元親

翌朝、目を覚ました信長は蘭丸に、光秀と丹羽長秀に直ちに登城するよう命じました。

まず信長が面会したのは長秀です。

信長は長秀には事務的な口調で「家康に5月15日に安土城に来るよう伝えてやれ、そしてお主が佐和山で出迎え、安土まで連れてこい」と言った後、やや顔を強ばらせながら「6月に入ったら信孝（信長の息子）を補佐して四国の長宗我部元親を討て。兵は2万、蜂谷頼隆、津田信澄らを指揮して兵站の準備をするが良い。堺港からの出陣は6月3日じゃ。その時は儂が見送りに行く」と命じました。

思いもよらず長宗我部討伐を命じられた長秀は、これから1か月余りで2万の兵をどのようにして集めるか困惑しました。

うつろな顔で待合部屋に戻ると、光秀が信長の面会を待っていました。

光秀はぼんやりしながら挨拶もほどほどに通り過ぎようとした長秀に「如何なされました」と声をかけると、長秀は「今殿から信孝様を補佐して長宗我部討伐に行けと命ぜられ、兵站の準備などで悩んでいたところです」と何の配慮もなく話してしまいました。

光秀の顔色は一気に急変し、長秀の着物の袖を力強く握りしめて「長秀殿、それは誠にござるか」と詰め寄りました。

長秀は光秀の狼狽した様子を見て、光秀と長宗我部とが親密な関係にあることに気付く、一瞬、配慮のない物言いだったと悔いしましたが、このことを隠したとしてもいずれは光秀の耳に入ると思い「光秀殿、今から1か月余りで急遽2万もの兵を集めるにはどうすればよいか、何か名案がございますか」と光秀の不憫な気持ちを汲みながら、的外れな問いかけで何とかその場を繕いました。



安土城信長の接客部屋

そもそも光秀と長宗我部元親は、明智家、斎藤家、石谷家、長宗我部家を通して、主従関係であり、また親戚関係で結ばれていました。

光秀の家臣に石谷頼辰（いしがいよりとき）という武将がいて、父親は土岐氏で代々守護

代を務めてきた斎藤家の末裔である斎藤利賢でした。

父と母が離婚したため、母の再婚相手である同じ土岐氏の石谷光政の養子になり、光政に嫡男がいなかったため、光政の長女と結婚して家督を継ぎました。

光政の次女は、光政が將軍足利義輝の幕府奉行職だった関係で、義輝の仲介で元親に嫁ぎました。これにより元親と頼辰は義兄弟になり、更に頼辰の実弟が光秀の家老斎藤利三でしたので長宗我部と石谷、斎藤家は親戚関係になり、光秀は家臣の頼辰、利三を通じて元親と強い絆で結ばれることになりました。

信長が長篠の戦で武田勝頼に勝利をした天正 3 年頃には、足利義昭が頼に御所を建て、毛利輝元をはじめ本願寺の顕如、上杉謙信、北条氏政、紀伊雑賀衆の鈴木孫一らを取り込んだ反信長同盟を形成していました。

そのころの四国は、土佐の国は長宗我部氏、阿波・讃岐は三好氏、伊予は河野氏、宇和島は西園寺氏が支配していましたが、長宗我部以外の武将は反信長勢力として毛利側に組み込んでいました。そこで信長は、光秀に長宗我部と同盟を結ぶよう取り計らえと命じました。



早速光秀はその調整役として頼辰を元親のもとに遣わして、信長との同盟に同意するよう働きかけました。

幸いにも元親は信長との同盟には喜んで受け入れ、元親が直筆でしたためた信長宛ての親書を頼辰に預けました。

本来ならば、信長に会うには重役の光秀が同席すべきですが、頼辰は元親が信長との同盟を切望している旨をいち早く信長に伝えたく、一人で信長が滞在している京の仮御所二条城を訪ねました。

信長は上機嫌で迎え、酒肴で持成しながら「頼辰、元親には四国は自由に切り取っても良いぞ。また、元親の嫡男の烏帽子親に儂が成るので、信の字を与えよ」と朱印状まで書いて渡しました。信長から四国統一の許可を得た元親は、四国の交通の要所だった三好氏の白地城（現 徳島県三好市）を攻め落とし、そこを拠点に阿波、讃岐の三好の領土を次々と侵略していきました。

そして、天正 8 年には讃岐、阿波二国を制圧し伊予の一部を残して、四国全土を勢力下に

置くようになりました。

しかし、信長が本願寺と和睦し、秀吉が毛利の勢力下であった播磨の三木城や鳥取城を陥落させたことで、阿波の三好康長や伊予の河野氏、西園寺氏などは信長に降伏し、今度は信長の後ろ盾を得て元親に奪われた領土を奪還しようと立ち上がりました。

特に秀吉は、毛利の強力な水軍との対決に備えるために、康長の持つ水軍を利用しようと秀吉の甥である秀次（後の関白、豊臣秀次）を康長の養子にして接近し、康長の後ろ盾になっていきました。

秀吉はこの機に乗じて光秀を窮地に追い込もうと考え、信長に「元親は毛利に劣らない戦力と戦略を持つ武将で、殿の天下統一の障害になるのは必至です。今後、四国全土を手に入れたら、殿の領土を脅かす存在になりましょう」と高松城攻めの最前線から文をしたため讒言しました。

天正10年の正月、信長は光秀に「元親に土佐と阿波南半国は残し、讃岐及び伊予、阿波の大半を信長に譲るよう伝えよ」と命じました。



この申し入れを受けた元親は、当然承諾できません。

そこで元親は「四国大半の領土は、私が苦勞の末に勝ち取ったものです。信長様の恩義ではありません。思ってもいないお言葉に驚きました」と親書をしたためて信長の要求を断りました。

信長は激怒します。

直ぐに光秀を呼び付け「光秀！元親が俺の要求を断ってきよった。今すぐ四国に渡って元親の首を取ってまいれ」と怒気を込めて言い付けました。

光秀は信長の怒りを少しでも鎮めようと「殿、光秀が必ず元親殿を説得いたします。今暫くの猶予をいただきたい」と頭を畳に擦り付けて嘆願しました。

信長は光秀の熱誠溢れる物言いに諭されて一旦は元親討伐を保留にしましたが、現実はそのようではありませんでした。

本能寺の変の1カ月前の天正10年5月上旬、信長は息子の信孝を三好康長の養子にして「信孝、これからは康長を主君であり父と思って存分に働け、そして讃岐や伊予、阿波を

思う存分切り取るのじゃ」と言い含めました。

光秀はその状況を知るや否や、家臣の利三に頼辰を通して義父の光政に正親を説得するよう指示しました。光政は義輝が三好義継・松永久秀に襲撃され死去した以降、長宗我部家の重臣として手厚く迎えられていましたので、元親の頑なに心情を和らげるのには、相応しい人物でした。

『元親殿、信長と戦っても長宗我部は勝てませぬ。今はただ耐え忍ぶことが賢明かと。隣国の明には「忍の一事は妙の門（忍耐から始めるだけで、様々な物事を絶妙に行うことが出来る）」という諺があります。土佐の領民と長宗我部一族の命を守ってこそ名君と言えましよう』と光政は熱心に元親を諭しました。

すると元親は「義父上様、苦勞して手に入れた讃岐や阿波を手放せと言われますか。元親は悔しゅうございます」と目に涙を浮かべながら「暫く考えさせていただきとうございます」と言ったまま自室に閉じ籠り、3日が過ぎました。



上記手紙：斎藤利三が義父の石谷光政に長宗我部正親を説得させるよう依頼した手紙

そして、元親は光政を訪ね「義父上様、断腸の思いで決断いたしました、今回は信長の要求どおり、讃岐や伊予、阿波は譲ります」と寂しげな表情で伝えました。

話は少し逸れてしまいましたが、こうした状況下で信長との面接を終えて控えの間に戻って来た長秀と光秀が出くわしたわけです。

光秀がその後暫く控室で待っていると、黒人で小姓の弥助が「信長殿が呼びです」と声をかけてくれました。

弥助の案内で信長の部屋に入ると信長は大層上機嫌で「待っておったぞ、光秀」と椅子に掛けるよう勧め、信長自からワインをグラスに注いで迎えました。まず信長が切り出したのは、5月15日に家康が安土城にやってくるので、接待役を務めて欲しいということでした。

しかしその後の信長の発言は、光秀にとっては全てが気に障る事柄ばかりで、何度も口答えを繰り返す結果となりました。

そして光秀に反論された信長は手にした扇で光秀の額を幾度となく打擲し、烈火のごとく怒りを露わにしました。

このやり取りが、本能寺の変を引き起こす一つの要因になった訳ですが、この続きは次回にさせていただきますと思います。

令和5年4月